

## 浜田光子さん（科生）

科生のボランティアグループ「ひまわり会」が75歳以上の独り暮らしのお年寄りに月1回の給食サービスを実施するようになって、今年4月で1年に。浜田さんはその中で料理の責任者として毎回活動しています。



最初は家庭料理のレパートリーを増やそうと思って、十年くらい前に地元料理クラブに入会したんです。その積み重ねを、今回この給食サービスに生かすことができました。子供たちが手作りのプレゼントを持つ

てきてくれて、お弁当に添えて配ることも、地域の方からの応援、とても励みになりますね。また、お年寄りから「おいがこり」という手紙をいただいたりして、もっと頑張らなければと思っています。

## チャム・チン・ハツさん（留生）



五年前にマレーシアから日本に留学してきたチャムさん。今春、高知大学農学部を卒業します。

日本への留学は子供のころから魚が好きで、水産の勉強がしたかったから、バドミントン同好会に所属し、二年間キャプテンを務めました。県選手権大会二部の部で優勝したことがとても思い出深いですね。四年間の大学生活では、いい仲間もたくさん得ることができました。卒業後は東京で二年間働き、その後、故郷へ帰ります。

## 戦後の解放運動・教育・行政が どのように行われたか ①

### 福祉教育から同和教育へ

福祉教員制度は長期欠席・不登学問題と部落問題とのかわりを提起はしましたが、それが学校全体の認識にはなっていない。たしかに長久・不登学の問題は福祉教員たちの活躍によって解決の方向に向かいましたが、そのことが直ちに支えあう仲間づくりや学級づくりと結びつかず、福祉教員の活動と学校や学級の受け入れ態勢に新たな矛盾を生むことになりました。

### 同和教育 シリーズ

「あの子が休んでくれて助かった」と思っていたのに、また福祉教員がつれてきた」とか「問題児は福祉教員にまかしておけ」といった声さえ聞かれたそうです。しかし、子どもたちにすれば、長期欠席・不登学といった形で長く学校や授業から離れていて、急に登校するようになってもすぐには教室になじめず、勉強についていけないはずがありません。このために問題児として扱われ、疎外される子どももできてきました。

こうして状況に気づいた福祉教員たちは、特別にこうした子どもたちを集め、遅れた学習をとりもどすための指導をはじめましたが、学年も違い、それぞれ、それぞれの教科の学力にも大きな格差があるわけですから一人ではとても対応できません。そこで、わずかな時間を利便しては同僚の教員たちに、厳しい部落差別のなかで、毎日必死で生きる親や子どもを説き聞かせながら二人と協力してくれる仲間をつくらせていきました。

こうして、かわりをはじめた教員たちは、子どもたちのもっている問題を解決するためには、その根源にある部落差別を解消する教育を進める必要性に気づいていったのです。

こうして本県の同和教育は、それぞれの地域で拠点となる学校を中心に、徐々にではありますがその輪をひろげ、各地で研究会などがもたれるようになりまし。

一九五一（昭和二六）年、西日本同和对策協議会の大会が高知市で開催され、「部落問題解決のための国策樹立」を政府に対して要求することを決議しました。こうしたことも弾みとなり、同和教育の取り組みが始まりました。

一方、全国的には近畿地方を中心に活動していた人たちが、一九五三（昭和二八）年に全国同和教育研究協議会を結成し、五月に創立大会を大阪で、続いて十一月に第二回大会が京都で開催され、四国からも多数参加しています。そして翌年には「四国はひとつ」を合い言葉に、四国地区同和教育研究大会が開かれるようになりまし。